

# 皮膚トラブルの改善

## ～ラードを使ったスキンケア～

施設名：介護老人保健施設 平成苑

発表者：伊藤 知貴

### 【はじめに】

高齢者の介護、看護にあたって皮膚のトラブルは常に大きな課題となっている、皮膚の生理的 주요機能は、体温調整作用と外界からの生体保護作用であり、皮膚は臓器を恒常的に保護する大切な役割を担っている。また、皮膚も年齢とともに変化しており、加齢による変化を考慮したうえで高齢者のケアを行う必要がある。皮膚の分泌が低下している高齢者に、保護クリームとして様々なものが使われている。当苑でも、皮膚のトラブルに関しては、ワセリンやオリーブオイルなど試してみたが、今回は、安価で手に入りやすい市販の食用ラードで試みた結果を報告する。

### 【方法】

対象は以下の2つの条件を満たす利用者とした。

① 抗ヒスタミン剤やステロイド剤、軟膏など皮膚に影響のある薬を使用していない

② 食物アレルギー、薬剤アレルギーがない

特に皮膚トラブルが強い以下の5名を対象者とした。

- ・A様(70代 女性)：骨折術後のギプス除去のため落屑が強かった
- ・B様(80代 男性)：腕時計を常に着けていたため発赤、掻痒が見られた。腕時計を外しても症状の改善無し
- ・C様(90代 女性)：下肢の乾燥強く軽い刺激で表皮剥離を繰り返していた
- ・D様(70代 女性)：肥満による腹部の摩擦にて発赤・びらんが出現していた
- ・E様(80代 女性)：臀部褥瘡治癒後、掻く行為頻回で掻き傷を作ってしまった

10月25日から11月30日の期間内で、皮膚の状態、日中や夜間帯での掻痒感があるかどうか、掻き傷のチェックなどを実施した。

方法は以下の手順で市販の食用ラードを使って処置を行った

1. 週2回の入浴後にラードを全身に塗布
2. 各対象者の特定の部位（下肢・手首など）に毎日、ラードを塗布
3. ラード処置の期間前、期間後に写真撮影し、前後での皮膚の状態を比較する

### 【結果】

実施した5名の利用者のうち4名に関しては掻痒感が低下し、実施前後での皮膚の状態も落屑が無くなり、発赤が軽減するなど肯定的な結果がみられた。改善が見られなかった1名に関しては臀部の皮膚トラブルで、掻く行為が頻回であったため、改善と悪化を繰り返していた。掻き傷を減らす目的でおむつ交換の回数を増やした所、掻く行為、掻き傷の減少がみられた。

### 【まとめ】

結果からラードを使ったスキンケアは、皮膚落屑、乾燥、摩擦による発赤・びらん、刺激による表皮剥離が無くなるなど、効果が得られた。しかし、臀部の皮膚トラブルに関しては十分な効果が得られなかった。その要因として、おむつを利用されており、おむつ内の汚染や湿潤による掻く行為を止める事ができなかったことが考えられる。

今後は要因となった掻き傷による皮膚トラブルの防止に対しても推進するとともに、ラードを使った、より良いスキンケア対策を継続していきたい。

# 「利用者の生活の質の向上をめざし」

～本人・家族の Need の達成～

施設名：通所リハビリテーション真徳苑

発表者：比嘉 麻里亜

運天 厚子 友利 一平

## 【はじめに】

近年のリハビリはADLの向上のみだけではなく利用者の生活の場を拡大させるため、手段的日常生活動作の向上も求められてきている。今回は自分の意思で移動したいという利用者の希望を叶える為、下肢筋力の向上を目的に取り組んだ事例を報告する。

## 【事例紹介】

T氏 60代男性。平成23年11月、左視床出血発症。リクライニング車椅子介助レベルにて退院。身体機能は平成12年の右被殻出血の影響が強く左片麻痺、座位保持・立位・立位保持困難、運動性失語を呈している。当通所リハへは平成24年7月より利用されている。

### 〈導入〉

家族が、T氏の為にと片麻痺用の車椅子（以下プロファンド）を業者より3年前にレンタルした。プロファンドを漕ぐ事により、下肢の機能が上がればと思いレンタルしたが、プロファンドを屋外で漕いでみるとなかなか前に進まない。操作もうまくできず困っている。ケアマネージャーを通しリハとしてプロファンドの練習を通所リハで取り組めないか？と相談があり練習を開始した。

### 〈方法〉

平成26年5月より通所リハメニューとしてプロファンドの操作練習を取り入れた。練習開始当初は麻痺側の左膝関節の可動域が悪く、うまく漕ぐことができていなかった為、関節可動域改善練習を同時並行で行った。プロファンドの操作について慣れるまでは練習時間を10分と決め、スタッフ付添いのもと操作方法の指導を行った。

### 〈経過〉

練習開始当初は左膝関節の関節可動域のが小さく、持久力も低下しており十分に自力駆動ができず、20mの距離を2回から行った。その後、左膝関節可動域が改善し持久力も向上した為、自力駆動が10分継続できるようになった。現在では、屋内では自力駆動時間約1時間、操作に関しては障害物に接触することなく操作ができるようになった。屋外では小さな起伏・傾斜にてレバー操作を誤るが指示を出せば自力修正可能。軽い上り下りは、駆動に多少努力を要するが自力駆動可能とな

っている。筋力・持久力の向上に伴い、これまで取り組むことができなかった平行棒内歩行練習も取り入れることが出来ている。

### 〈結果〉

練習開始当初と比べると20mで疲労を訴えていたT氏が、現在では約1時間自力駆動できるようになった。また、プロファンドの操作においても指示なしで周りの状況を判断し、ほとんどぶつかることなく操作が可能となった。他のADLとしては、2年前は2人介助でトイレ動作を行っていたが、現在では1人介助で可能となっている。介助量が軽減した大きな要因は、下肢筋力が向上し立上りや立位保持が自力でできるようになったことである。

### 【考察】

身体機能の回復に関しては、脳血管疾患の方の場合、急激に麻痺の回復が見られるのは発症後から半年といわれている。今回の利用者の場合も麻痺の程度は2年前と変化はない。しかし、関節可動域の改善と心肺機能の上昇で持久力が向上したことが今回の結果につながったと考える。2年間という練習期間が持久力の向上とプロファンドの操作感覚を養い、操作についてはほぼ自立レベルまで達したと考える。T氏の場合、家族と本人の家の周りを散歩できるようになりたいというNeedに応えられる手前まで来ていると考える。

### 【まとめ】

利用者・家族のNeedをくみ取り、それを実現することでQOLの向上ができると考える。利用者全員のNeedはばらばらである。通所リハに通われている方はリハビリだけが目的ではなく、利用者同士の交流や引き籠り解消など多岐にわたる。介護士や看護師・リハ職等が1つのチームとなって利用者全員のNeedを理解し、支援していくことが大事である。そうすることにより、各々の利用者にとって一番いいケアができるのではないかと考える。

# ミールラウンド

～食事から生き方を考える～

施設名：介護老人保健施設アルカディア

発表者：宮平葉月

島尻美和 志慶真希美 宮國元喜

金城宗弘 下條尚美 平良浩代

## 【はじめに】

当施設アルカディアでは、入所者が認知機能や摂食・嚥下機能の低下により食事の経口摂取が困難になっても、自分の口から食べる楽しみを持ち続けていけるよう、多職種で食事観察（以下ミールラウンド）を行っている。平成27年7月から開始したこの取り組みについて、現状と見えてきた課題を紹介する。

## 【方法・結果】

入所職員を対象に、アンケート調査を行った。ミールラウンドに参加するマネジメント職に聞き取り調査を行った。

アンケート調査の結果を以下に示す。

Q1. ミールラウンドについて取り組みの目的を理解し、必要性を感じるか。

①目的を理解し、必要だと感じる 75.9%、②目的は曖昧だが必要だと感じる 10.3%③必要性を感じない 0%④無回答 13.8%

Q2. ミールラウンドの参加率。介護職員 57.1%、看護師 42.8%、セラピスト・その他マネジメント職 100%

Q3. ミールラウンドを開始してから感じた変化について。

①利用者の栄養状態や全身状態が良くなった 65.5%、②利用者やその家族が喜んでいった 27.6%、③職員のモチベーション向上につながった 27.6%

Q4. ミールラウンドからの申し送りを日々のケアに取り入れているか。

①意識して取り入れている 72.4%、時々取り入れている 20.6%、③意識していない 6.8%

Q5. ミールラウンドの改善点について(自由回答)。「専門職が行っていることという意識が現場スタッフにあり、ラウンドへの意識が薄れている印象を受ける。」等があった。

聞き取り調査からは、「専門職だけではリスク管理を重要視した評価になっていたことに気づいた。」「多職種が揃って一度に相談できる貴重な場面だと感じている。」「ミールラウンドで決まったケアが継続して行えていない。」等が

あった。

## 【考察】

私たちの目指すミールラウンドは日頃から利用者と接する現場スタッフを中心に各専門職とディスカッションを行うことで、利用者の食事の楽しみを支えていくことである。しかし、ミールラウンドの改善点についての意見から、現状はマネジメント職と現場スタッフに意識の違いがあった。取り組みの必要性は感じているが、介護職員と看護師の参加率が5割程度であることが要因だと考えられる。今後はこれら職種が参加できるよう、参加方法を見直す必要性を感じた。

また、申し送り方法にメールを活用していることで、勤務体系が複雑な入所でも職員全体に利用者の状況を周知できており、根拠をもって食事介助を行えるようになった。そのため、食事への意識向上が見られたと考えられる。一方、聞き取り調査では、ミールラウンドで決まったケアが継続して行えていないとあり、改善できるような体制づくりを検討する必要がある。

ミールラウンド開始により、利用者の状態が良くなったと感じたのは、専門職のみでは「危険、安全」のリスク管理に留まる傾向があったが、生活場面に多く関わる介護職員や、家族・本人の食事に対する想いや楽しみを把握する介護支援専門員が関わることで食事への楽しみや本人の想いを含めて意見交換ができ、利用者の喜びや状態変化につながったと考えられる。

## 【まとめ】

入所利用者の多くは介護度が高く、外出頻度も少ないことから、食事にかかる楽しみは大きい。ミールラウンドの取り組みから、職種問わず「最期まで口から食べる」ことへの意識が高まった。今後は、介護職員と看護師も主体的に参加することで、食べる楽しみや生活の質を高めていくことを考えながら多職種が連携できるよう、体制を見直していきたい。

# 作業活動を通して

～利用者様の笑顔の増加を目指して～

施設名：白寿園 通所リハビリ

発表者：渡慶次瑛平(通所介護)

仲宗根百合香(管理栄養士)

賀数円(理学療法士)

## 【はじめに】

白寿園通所リハビリでは、ちぎり絵等の作業活動や集団レク・リハビリ等の運動を提供している。職員としては「心身機能の向上」「QOLの向上」を目的に、利用者様の笑顔を増やしたいという思いのもと、日々支援を行っている。その中で、作業活動についてのアンケートを実施した。結果、活動に満足しているがマンネリ化を感じる方が多く、他の作業提供が必要であるとわかった。

今回、アンケートを元に他職種と連携し、野菜栽培を行った。実際に苗植えから実食までを行うことで、刺激的な作業活動(野菜の生長に関わり、四肢を動かし、野菜を育てる楽しさを五感で感じる作業活動)の提供と、それに伴う満足度の向上や笑顔の増加に向けて取り組んだ内容を報告する。

## 【方法】

アンケート：取り組み前 平成28年8月下旬  
(アンケート内容:作業活動の満足度、  
野菜栽培の経験、野菜栽培への興味)  
取り組み後 平成28年11月上旬  
(アンケート内容:感想)

対象者：通所利用者様16名(73～98歳)

苗植え：平成28年9月15日

水やり：平成28年9月下旬～11月上旬

(通所利用者様：1回/日、AM10:00～11:00)

収穫：①9月23日：ニラ

②10月6日：サンチュ、サニーレタス

③10月12日：サンチュ、サニーレタス

④11月9日：ニラ、サニーレタス

⑤12月6日：ニラ

実食：収穫翌日に提供

連携部署：通所リハビリ、栄養課、リハビリ

## 【経過】

### 1. 苗植え

8月末に通所利用者様16名を対象にアンケートを実施。9月中旬に苗植えを開始。利用者様同士の会話から、「久しぶりに土を触った」「いいリハビリになるね」等の声が聞こえた。また、普段ではみられないような積極的な行動や言動がみられた。

### 2. 水やり

苗植え翌日から、水やりを実施。利用者様から「水やりをしなくても大丈夫？」等の声が聞こえたり、「早く育ててほしい」等の声もあり、成長を楽しみにしている方が多く、笑顔もみられるようになってきた。

### 3. 収穫・実食

苗植え時はアンケートを元に興味のある方が中心に作業していたが、一人の利用者様が収穫した様子を見て興味のなかった利用者様も「私も収穫したいから水やりをしたい」と参加した。結果、最後の収穫の際は、ほとんどの利用者様が参加することができた。調理は栄養課が担当し、実食の際「美味しい」と笑顔があふれた。また、おやつ会においても、収穫した野菜を提供することで、満足度の向上につながった。

## 【考察】

普段提供している作業活動でも、やる作業が同じであればマンネリ化を招き、質の低下につながる。

野菜栽培を通して、四肢の運動や五感を刺激させることができるとともに、成長していく過程をみることや仲間との共同作業を行うことで、生きがいや周囲との交流も図られる。また、過去の思い出を思い出すことで脳への刺激も期待できる。

当施設の通所利用者様は、昔畑をやっていた方が多く、久々に土や苗に触り育てることと収穫・実食までを行うことで、楽しみ・笑顔が増え、自発的な言動や行動、活気がみられるようになった。また、他利用者様にも楽しさが伝わり、参加人数が一人、また一人と増えていった。

## 【まとめ】

今回、アンケートを実施することで、利用者様の意見を聞くことができた。野菜栽培では、多くの刺激があり、利用者様の笑顔が増え、他利用者様へも楽しさが伝わり、ほとんどの利用者様が参加した。結果として、作業活動の提供による満足度の向上と「美味しい、楽しかった」という笑顔の増加につながった。

# 安全に生活していただくために

～介護現場にインカムを導入して～

施設名：西原敬愛園

発表者：介護福祉士 外間 旭

## 【はじめに】

現在、当施設では100名近い利用者が生活しているが、介護職員の数は十分といえず、限られた人員で日常の食事・入浴・排泄ケアを行っている。また、不穏状態・マンツーマン対応・要所在確認者に人員を取られる事があり、独歩や車椅子自走される利用者の安全確認不足から事故に繋がってしまうケースがあった。以前から事故の原因は、声かけが不十分な為に起こる「連携不足」「所在確認不足」が多く、その改善は一つの課題であった。そこで、職員間の連携不足解消及び情報共有を細やかに行き、限られた人員で効率的にケアを行う為に、インカムを導入し業務にあたることにした。インカム導入前と後でどのように業務が改善されたか、また、日頃の業務を効率的に行うにはどのようにインカムを使用するのがよいのかを職員のア

## 【調査方法】

- インカム使用に関するアンケートを実施
    - ・平成28年7月中旬に計16台のインカムを購入。初期設定等を行いH28年8月より使用開始。2ヶ月使用経過後にアンケートを行った。
    - ・対象職員は実際に使用している老健（入所）の介護職員及び看護職員の46名。（休職中の者を除く）
    - ・アンケート回収率は96%（44/46）。
    - ・アンケート内容は以下の通り。
- Q1.インカムは業務を行うにあたり役立っているか？  
Q2.どのような点で役に立っていると感じるか？  
Q3.インカム導入後のケアの質は良くなったか？  
Q4.どのような点が良くなったと感じるか？  
Q5.インカムの使用時の問題点

## 【アンケート結果】

- Q1.インカムは業務を行うにあたり役立っているか？  
①非常に役立つ：53% ②役立つ：40%  
③あまり役に立たない：7% ④全く役に立たない：0% ※①②合わせて9割以上の職員が役に立っていると感じている。
- Q2.どのような点で役に立っていると感じるか？  
・情報を伝達したい対象職員を探し回らずに、すぐに用件を伝えることが出来る  
・ナースコールの対応がスムーズになった。  
（鳴った時に「行きます」との声かけが有るため、安心して別の利用者への対応が出来る）  
（皆が同じコールに向かわなくても済む）  
（複数鳴った場合の分担）  
・緊急時などヘルプが必要な場合、迅速に応援を呼ぶ事が出来る。等  
※主に行動の効率化についての意見が目立った。インカムを利用することにより誰が誰を対応しているのかが把握でき、対応中の利用者の介助を中断する事が少なくなったとの声もあった。
- Q3.インカム導入後のケアの質は良くなったか？  
①とても良くなった：21% ②良くなった：62%

- ①変わらない：17% ④悪くなった：0%  
※Q1.同様8割以上の職員が「良くなった」と感じている。「悪くなった」は0%だったが、「変わらない」が17%と「業務上の利便性」は向上したがケア自体には変化が無いと感じている職員もいる模様。

- Q4.どのような点が良くなったと感じるか？  
・時間のゆとりが出来、丁寧な声かけ対応が出来る  
※職員に安心感や心の余裕を与えることで、以前に比べ落ち着いた対応が出来ていると考えられる。

- Q5.インカム使用時の問題点（複数回答可）  
①無い：3件 ②聞こえづらい：25件  
③自分の声が聞こえているか心配：11件  
④混線が多い：13件 ⑤故障が心配：8件  
⑥バッテリーの持ち：0件 ⑦衛生面：17件  
⑧着用しない職員がいる：7件 ⑨その他：9件  
※「②聞こえづらい」という声が1番多かった。ノイズのような雑音が多く聞こえづらいと感じる。機種自体の性能にもよるところだが、コスト面を考慮すると即時に別機種への買い替えは難しく現在は経過を観察中。「⑨その他」では台数が少ないとの回答がほとんどであった。必要に応じ、台数の増加を検討していく。⑦の「衛生面」が気になっている職員も多い模様。現在、イヤホンマイクは共有のものを使用しており感染症の予防も必要になってくると思われる。

## 【考察】

アンケートによりインカム使用に関しての意識や問題点の確認を行ったが、介護現場でのインカム導入は職員に心の余裕を与え「職員同士の連携」と「利用者への対応」の向上に繋がっていると、この調査で分かってきた。また、インカム使用の効果により実感できるのが夜間帯の少ない人数での連携で「他の利用者対応中のヘルプ」や「利用者の状態の変化を看護へすぐに報告ができる」という点で特に利便性を感じている。そして、インカムを使用することにより事故の件数は減少傾向にある。  
7月：14件 8月：17件 9月：7件 10月：2件  
8月は前月に比べ事故件数は増加したが導入開始月の為、職員がインカムを上手く活用出来ていなかったものと思われる。その後はインカムを継続して使用していく中で、利用者への所在確認と職員同士の連携に対しての意識が高まった事により9月からの事故が減少してきていると考える。

## 【まとめ】

今回、インカムを導入して事故件数を減らす上で、ある一定の効果を上げることができた。それと共に「職員へのケアの質の向上」にも繋がっていると考えられる。今後はインカムの使用方法を定期的に話し合う場を設け、職員全体で使用方法を統一することにより業務の円滑化と利用者へのさらなる安全と安心した生活を提供できるように取り組んでいきたい。

# アセスメント力向上に向けた取り組み

施設名：介護老人保健施設 オリーブ園

発表者：仲宗根 哲也

真喜屋 賢二 堤 雄二

## 1. はじめに

当老健では、平成27年度より介護ソフトの入替に伴い、R4システムを同時に装備した。利用者のニーズやケアの目的を明確にすべく使用していたが、介護職員のアセスメント力にバラツキがあり、うまく機能しない現状があった。今まで使用していたアセスメントシートはADLチェックが中心であったため、利用者ニーズの抽出を拾い上げる事が不十分であった。そこで、介護職員が利用者のニーズを明確に引き出せるよう、新たなアセスメントシートを作成した。新たなアセスメントシートの導入及び取り組みについての振り返りをアンケート形式で調査したのでここに報告する。

## 2. 取り組み

1) アセスメントシートの概要

①食事援助、②排泄援助、③入浴援助、④洗面・口腔・整容・更衣に関するケア、⑤基本動作・リハビリテーションに関するケア、⑥認知機能・心理・社会面に関するケア、⑦医療・健康に関するケアの7項目に分け、項目毎にアセスメントの視点を導入する。

## 3. 調査方法

1)調査対象：当老健施設に勤務する介護職員常勤24名中、新人を除く22名【男女比：(13：9)、平均経験年数：(約8年)、介護福祉士資格者(20名)、学校等で介護過程を学んだ者(8名)】

2)調査方法：アンケート調査による質問形式。自由回答形式。匿名での回答と回収を行う。

## 4. 調査結果

1) アセスメントシートを変更後、以前に比べて業務の負担は増えましたか。

(1)「増えた」55%、(2)「変わらない」41%、(3)「減った」4%

2) アセスメントシート変更後、利用者への観察ポイントは増えましたか。

(1)「増えた」77%、(2)「変わらない」23%、(3)「減った」0%

3) アセスメントシートを変更後、利用者(ご家族)のニーズの把握ができるようになりましたか。

(1)できた59%、(2)変わらない27%、(3)できていない14%

4) アセスメントや経過記録に対する記載ポイントが分かるようになりましたか。

(1)分かるようになった82%、(2)変わらない14%、(3)分からない0%、(4)未記入4%

5) アセスメントシート変更後、ケアの目的が明確になったと思いますか。

(1)思う82%、(2)変わらない13%、(3)思わない0%、(4)未記入5%

6) アセスメントシートを使うようになったことで、さらに介護の仕事にやりがいを持てるようになりましたか。

(1)持てるようになった91%、(2)持てない0%、(3)未記入9%

## 5. 考察

アンケート調査では、新たなアセスメントシートを導入したことに肯定的な意見が多かった。特に「利用者への観察ポイントが増えた」「ケアの目的が明確になった」という回答から、「介護の仕事にやりがいを持っている」と91%の職員が答えた結果より、ケアの目的が明確になった事が介護業務のやりがいに繋がっていると示唆された。

しかしアンケート対象者の14名が介護の養成過程でアセスメントを学んでいない事から、その作成に要する負担が大きい事も結果から伺えた。

今後、アセスメントシートを活用した新人教育や、これまで行われていなかったスタッフカンファレンスを導入し、情報共有や、情報分析方法等を学べるシステムを構築していく。